

〔雲萍雜誌〕^二奈良の二月堂にて、むかしは青竹にて、龜末なる茶筥を賣り、老若男女これをと、のへて、詣たる去るしとしてかへりぬ、家にありては是をもて茶をたて客をもてなすこと、南都の風なり、今はこの茶筥たえてなし、むかしを思ふに、青竹の茶筥、龜なるに、茶を立て老をやしなふこと、ならはしとせしを、今時はあたひたうとき器にて茶をして、心を勞し、壽を縮る人少なからず、むかしの人、今の人と懸隔あることかくの如し、

〔茶道便蒙抄〕^三茶筥置之事

一臺も天目も名物なれば、天目に茶筥、茶杓不仕込置合る也、茶を立るとき、茶筥置に茶巾、茶筥、茶杓仕込持て出、建水の先に置、茶杓、茶筥取出し、常のごとく置合る也、茶巾をば其儘置、天目をふきて後も茶筥置に置くよし、幾度も同然也、扱茶筥置の茶碗は、高麗のねすみ色くはんにうの手か、青磁か、形は當代薄茶碗と云形比を用る也、

〔貞要集〕^三茶筥置之事

一茶筥置は、薄茶茶碗のごとく形あさき物也、古來は青磁、三嶋、高麗染付を用ひ申候、此時は茶巾を疊茶巾にして、茶杓は象牙にて有之候、今も瀬戸、唐津焼などにて、あさき茶碗を用ひ申候、茶せんを取時は茶巾を片寄せ置、又茶巾を取時は茶筥を片寄せ、二品共に取能様にいたす事、效なり、〔茶窓閒話〕^中茶筥置の茶碗に志野といふ名物あり、是は白磁の手なり、白薬がこり、こまかなる裂文あり、茶碗の耳を五葉の花形にきざみ付たるものなり、今はいづかたに有やらん、去らすと、

〔千家茶事不白齋聞書〕茶筥立之事

一杉ノ板ニ竹四角成針三本打たる物也、水遣棚ニ置テ茶筥ヲ立形物也、

〔茶道筵蹄〕^五集雜

茶筥筒 竹にて底紫檀を入る、利休形なり、杉の曲物上のひらきたるも利休形なり、